

## 『政治の悲しき任務』の時代

対談者 J A F 会 長・高橋 幹夫

オブザーバー評論家・大前 正臣

幹事長時代の発言であり、政策の外注、内外の政治家、自民党の体質、中産階級などについて興味深い持論を語っている。高橋氏は平成元年死去。

政策は『外注』の方がよろしい？

高橋 幹事長が香川の二区で代議士になりましたのは、何年ですか。

大平 昭和二十七年です。

高橋 当時私が隊長（香川県警察本部）でね、取締りをしていた。

大平 こわい人だった。（笑）

高橋 それから香川の二区の代議士で初めて出た当時の初心と、その後、大臣までやられて偉くなつたんですけれども、いまの大平さんをご自分でどう感じますか。

大平 私、別に青雲の志があつて代議士になつたわけでない。三年半も（蔵相）秘書官をやつていたもんですから、事務と政治の混血児みたいになりましたね。事務に戻るか政治に出るか一種の岐路に立つたわけです。で、池田さん（元首相）が、まあやってみたらどうだという話になって、それじ

ややってみようということになった。代議士は自由業ですから、弁護士とか計理士のように土がつくんですね。つまり自由業ですから九時に出勤して五時に退庁するという必要はない。出て出なくてもいい。案外自由で暇そうに見える。ところが、なってみると意外に代議士というのは忙しいものであることがわかった。(笑)

高橋 しかし幹事長は、忙しい割合に勉強家の方じゃないんですか。

大平 ほとんどそんな時間はありませんけどね。往き帰りの車の中で本を読んだり、あるいは秘書官からレクチュアを聞いてみたりして、多少の勉強をしているんです。しかし、私は代議士にとって政策は外注でよろしいのではないかと、この頃つくづく思うんです。こういう問題はどうか対処したらいいか処方策を書いてくれと、大学の先生や研究所の研究員等の方にお願ひする方がよいと思います。

高橋 一種のブレーン……。

大平 その中でこれという処方策を選び出して、それでもってびしびし対処していく。とても自分で本を読んで自分で政策を立案する暇はない。私はその方が学者に対する礼儀でもあると思つし。

高橋 大前さん、あなた外国へ行つて、大統領とか政治家に会つてきていらっしゃるが、アメリカと日本の政治家の違いがありますか？

大前 アメリカの場合は、議員と行政官と画然と違つていますからね、三権分立で。アメリカではいろいろな調査委員会というものがありますから、特にスタッフを入れてそれから学者に発注して、研究さして調査さして、それでもって議員先生はそれに目を通して、これはいいとか悪いとかいうわけです。基本的には政策を操っているマネジャー的な面が、前からアメリカの場合はあるようです。

戦後の宰相として最高峰の吉田さん

高橋 ところで亡くなった池田総理ですが、私も警備部長の頃いろいろお世話になったし、まあいろんな面では接触したわけですけども、池田総理の横顔というのを一つ幹事長から。

大平 私は平凡な方であったと思いますよ。言いかえれば偉人ではないと思いますね。欠点だらけの人でした。ただ私が彼に感心するのは、一つは抽象論ではなく具体的に事柄をつかんでそれに具体的に応えようとする態度です。天下国家を抽象的に論じて事足りりとししないで、問題を具体的に解決していくという誠実さというのが、熱心さというものがありませんね。

大前 プラグマチストですね。

大平 それに、非常に好き嫌いが激しい人でした。人間に対してもお金に対してもそうだった。お魚を料理して食べる場合に鮮度が問題になりますね。鮮度がいい魚を食べないとお腹をこわしてしまふ。それと同様に鮮度の悪いお金というのは、もらってはいけないということでしょう。(笑)

高橋 総理といえは、亡くなった吉田総理ですね。大平さんが選挙演説をやったあの頃、応援にみえましたね。そして大平さんを紹介する時に名前を忘れちゃって、大平と言わないわけです。(笑)それでもまあ、あの人は悠然としておりましたね。あの人はどういう感じがありましたか。

大平 これはもう、ずば抜けて偉いな。

高橋 どういう面ですか。

大平 戦後の政治家で、群峰に秀ずる高い山だったなえ。それはどういふことかということ、彼は国のために命を張っておった。こわいものがなかったんだ。

高橋 悠然として動かなかったですね。

大平 マツカーサーであろうと誰であろうと、彼にこわいものはなかったんだ。そして自分が総裁をしておる自由党という政党が全部賛成しても、自分一人がノーと言えるんですね。ノーと言ってそれを通すんですね。

高橋 座談がうまいですね。私も大磯に行ったことがあるんですよ。驚いたことは、つまらんものを持っていくわけですが、ちゃんと女中さんが来て高橋さんからこういうものをいただきましたという、「いや高橋君、どうもありがと」とおっしゃるんですね。外交官でもあるんでしょうけど、そういう別の面からみると人情という細かいことでも、そういう配慮というものがありましたね。

大平 私が何か持っていくと、何をいただきましたと報告があつてから、(声をひそめて) 君、現ナマでも苦しゅうないよ (爆笑) というんだから、ぬけぬけとね。実に大らかな人だったね。

### カーターの信条・政治の悲しき義務

高橋 大平さんは、外務大臣をずいぶん長くやっておられたわけですが、外国で会った政治家の中で、領袖とか大統領とか総理とかいろいろありますが、会った感じからみるとどうですか、外国の政治家というものは。

大平 ずば抜けてスケールの大きいのは、やっぱり毛沢東とかドゴールですね。つかみどころのない、茫洋たる大きなスケールを持っておりました。しかし実践政治家として非常にすぐれた人は、周恩来氏じゃないだろうか。

大前 いまのアメリカの大統領のジミー・カーターですね。彼がおとし日本に来ましたが、彼の印象はどうだったですか。

大前 あまり深い印象は持っていないんですよ。三、四十分話しましたが、気さくな人でざっくばらんに、いろいろな話をしましたが、まさか大統領になるとは、その当時思わなしねえ。そうと判っていたら、もう少し注意して会いましたよ。(笑)

高橋 あの人は、大前さん、どういう人ですかね。

大前 ぼくの中では複雑な人だと思っんですが、一つ言えることは、ものすごく計画的だということですね。もう一つは、その計画を断固としてやり抜くという意志の強さですね。馬鹿にされても、忘れられても、この計画どおりに自分が実行すれば、必ず大統領に当選するんだという満々たる自信を秘めてやるわけです。一日に二十回、神様に祈るわけです。何の問題でも神様が正しいといっているんだから、やっぱり正しい。自分が実行しなきゃいけないんだという信念があるんじゃないですか。

大前 彼は、『Why not the best?』という私に贈ってきた本(自叙伝)の一頁目の一番上に、小さな文字で *The sad duty of politics is to establish justice in a sinful world.* 。つまり正義を打ち立てるといふことは、政治にとって悲しき義務だという意味の言葉を引用していますね、何度トライしても正義はなかなか打ち立てられない。しかし成功しないかも知れないが、それでもやらなければならない。それが悲しき義務だというわけですね。

大前 カーターが傾倒していたラインホルド・ニーバーという六十年代の有名な神学者の言葉ですね。

自民党の体質改善を六〇点主義で……

高橋 少し生ぐさい話になりますが、今度の自民党の体質改善というのは、幹事長が一つの担当をやっておられるんですが、私はなかなか難しいと思うんです。いまは保革伯仲とかなんとかではなくて、一種のキャスティングボードの時代だと思っんですがね。そういう時代に対応する自民党というものは、どうするべきか。自民党のあり方、内閣のあり方について、お伺いしたいんです。

大平 高橋さんのいうキャスティングボード時代というのは、いわば多党化した時代をいうんでしょうね。絶対優位の党がないという時代に、われわれが、どう振舞うべきかという問題だと思います。日本では五つか六つの政党があつて、それが自民党的な考え方、社会党的な考え方、共産党的な考え方というふうに、世論を整理しているわけですね、各政党が……。

ところが整理し切れない、つまり支持政党を持たざる層というものが、このところだんだん肥大化してきました、自民党よりでかくなってきているというような時代です。そういう時代ですから、まずわれわれは、謙虚でなければならぬ。つまりわれわれは、少数派だという頭がないといけない。われわれは確かに得票は四〇%をとった。しかし、その四〇%というのは、七〇%の投票の四〇%ですから、つまり全体の中では三割政党だということです。しかしながら依然として私どもが第一党であるということは間違いない。ですから全体のコンセンサスをまとめあげていく上において、一番責任が重いんだということを考えておかねばならない……。自民党の改革というのは難しい仕事です。私は万幸、六〇点主義の哲学なんです。そんなに七〇点も八〇点も取れるもんじやないと思うんです。人間なんて、そんなに立派にできていない。といって五〇点では困るけどね。

高橋 六〇点ないと困るですね。

大平 高等文官試験を受けても六〇点平均以上が合格

高橋 ほとんど六〇点ですね。七〇点というのはいない。

大平 あの程度のことだと思っんですよ。われわれの実際の政治は、いくら逆立ちしてみても、あの程度なんです。六〇点を割るようなことのないところを目安にやっていかんとねえ。だからあまり立派なことと言わないことになっているんだ、私は。

### 中産階級に対応する政治が重要

高橋 最近、中産階級論というのが出ていますね。その中で、例えば英国における中産階級というものとは何か。アメリカにおける中産階級というものはどういうものか。あるいは西ドイツはどうか。日本の場合においても、将来の方向として、そういうものはある程度価値観は違つかもしれないが、だんだんそういうコンセンサスというものが出てくる方向は、私は一種の中産階級というものを考えてみる必要があると思います。中産階級というものにどう対応していくかということが、全体の多党化の中で何らかのそういう面の方向ができるんじゃないかと思っんですけれども、私はよく振り子の原則というんですが……。

大平 日本は一番中産階級の国じゃないですか。日本人の九〇%ぐらいは、自分は中産階級と思っっているんじゃないですか。

大前 九五%ですね。最近の調査では。

大平 貧富の差が少なく階級的な差別意識が一番少ない国じゃないですか。日本はよくできた国だと思っけれども、意外に議論が多い。例えば税制でも、三千万円ぐらいの所得者以上は世界一負担率が高いと思いますね。累進税率が一番高い。課税最低限は二百一十円で、逆にこれは一番高い。そういう意味では日本は下に安く、上に重い税制になっておるんだけれども、自民党政府は上に薄く、下に厚いとよくいわれるんですよ。(笑)例えば三百万円という所得を考えた場合に、日本では八万円の所得税の負担ですが、英国は七十五万円で、アメリカが二〇万円で、ヨーロッパの国が二〇万円と七十五万円の間にもんな入っている。ですから日本は税金が重い国とはいえない。先進国の中で一番安い国で、農民の中で所得税を納めている人は、ごくわずかではないでしょうか。それから会社の社長と給仕、総理大臣と給仕、大使と給仕等の給料の差を比較してみると、日本が一番上下の差が少ないのではないですか。

高橋 私どもの仕事からいえば、それで自動車が売れるわけでしょう。

大平 階級差別感がないんだ。わしらみたいに、百姓の次男坊が、大蔵大臣になって平気であるんだから。こんな国はちよつとないと思います。

### 本当のことを国民に知らすべき時代

大前 さつき吉田さんの話ができましたけど、どうも現代の政治というのは、あまり大衆迎合主義になりすぎている面があるんじゃないかと思えます。税制の問題を先ほどお聞きしたんですが、そういうことを国民はよく知らないわけですね。そういう事実を、もっと勇氣をもって伝えるということが

望まれるんじゃないですか。

大平 高度成長が可能であった時代は、成長の果実というものを、毎年毎年、国民に配分していくことができた。そういうやり方で、多少甘いことを約束して実行できたけど、低成長、ゼロ成長、あるいはマイナス成長を覚悟しなければならぬという時代になると、そういうやり方では、やり切れなくなってきた。客観的な事実がそうなってきたので、われわれとしても甘いことを言えない。言ってもなかなか実行できない。真実を語り、困難を説き、辛抱をお願いするということ以外に、やりようがなくなってきたているんじゃないでしょうか。本当のことをまず知ってもらい、理解してもらう。こういうことをやるうとしていて、いうことを理解してもらって、それを実行している間、しかも世の中がおかしくならぬだけのことを、ちゃんと用意してかかる。それが、政治の任務ではなからうか。

大前 政治の悲しき任務ですね。(笑)

大平 そう。カーターさんじゃないが、そういうことかも知れない。

高橋 どうも、きょうはいろいろお伺いできて、ありがとうございました。